

2022年3月27日 主日礼拝

説教題「希望の賜り物としての『赦し』」ルカによる福音書 6章 27～36節

主任牧師 加藤 誠

「しかし、あなたがたは敵を愛しなさい」、「あなたがたの父が憐み深いように、あなたがたも憐み深い者となりなさい」(ルカ6章35節、36節)

「福音」とは「喜ばしい知らせ」のこと。主イエスは私たちを「新しい喜びの世界」に招き入れるために来てくださいました。

「しかし、敵を愛し、あなたがたを憎む者を親切にしなさい。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい」。ここで主イエスが私たちに示しておられるのは、私たちの心の中に自然に沸き起こってくる思いとは「真逆のもの」ばかり。わたし自身、悪口を言われ侮辱されたら我慢できない。激しく反論したくなる者です。けれども主イエスは、そのわたしの心の向きをひっくり返して「神さまの愛が導かれる新しい世界と一緒に望み見ていこうではないか。あなたの敵を愛しなさい」と、わたしを「新しい世界」に招かれるのです。

人びとが、はじめてこの主イエスの「敵を愛しなさい」という言葉を聞いたとき、大きな衝撃を受けたことでしょう。なぜなら、当時の世界では「目には目を、歯には歯を」が常識だったからです。「やられたら、同じだけやりかえしてよい」。「同害報復」が暴力のブレーキになり、過剰な暴力の応酬を防ぐことにもなっていたからです。そこに人間の知恵がありました。ところが、主イエスはその常識を根底からひっくり返されます。この主イエスの言葉を聞いた人々の中には大きな反発を覚えた人もいたことでしょう。「敵を愛し、悪口を言う者に祝福を祈り、自分の頬を殴る者にもう一方の頬も向けて、奪い取ろうとする者に与えよ」というのなら、暴力で人びとを支配しよう連中をますます凶に乘せてしまうことにならないか、と。

けれども「神さまの愛と赦し」は、人間の知恵をはるかに超える力を持っていることが、やがて証明されていきます。

主イエスは、ここで教えられた通りに、日々愛と赦しを実践して生きられました。私たちには「とても無理だ」と思えることを、主イエスは深い祈りにおいて神さまにつながり、実行していかれました。自分に憎しみをぶつける人々を覚えて祈り、十字架の上で浴びせられる侮辱をすべて受け尽くして「主よ、彼らを赦してください。彼らは自分で何をしているのかわからないのです」と祈ってくださったのです。

その結果どうなったのでしょうか。確かに主イエスに憎しみをぶつけ、十字架に追いやった人間の暴力は勝利しました。が、その勝利は一時的なものでしかなかった。「あなたがたは世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ 16 : 33) の御言葉の通り、主イエスの愛が人びとの罪に勝利されたからです。主イエスが墓の中から起こされ、復活の希望の息吹が弟子たちに吹き入れられると、主イエスの神の愛と赦しのメッセージは世界中に持ち運ばれて、「神の愛による新しい世界」を生み出していきました。主イエスの時から二千年。人間の憎しみと暴力は相変わらず力を振るい、悲惨な現実を毎日生み出し続

けています。けれども罪の闇を深く抱えた人間を赦し続ける神の愛に触れて、「あなたの敵を愛しなさい」という御言葉に従う人びとが、世界の歴史の中に次から次へと起こされていきました。

例えば、約60年前アメリカの公民権運動を導いたキング牧師がそうでしたし、今から28年前にルワンダで起こった大虐殺の後にも、主イエスの「あなたの敵を愛しなさい」という御言葉に励まされた人びとが起こされていったのです。

キング牧師はこのようにことを語っています。「主イエスはあなたの敵を好きになれと言われたのではない。祈りなさいと言われた。赦すとは、相手の非道を容認することではなく、裁きを神に委ねることだ。私たちが祈りを通して十字架の主イエスの愛につながられる時、敵のために祈る力が与えられていく」。「憎しみにとらわれているとき、憎しみは私たちの人格を癌のように侵食するが、私たちが憎しみを神に委ねることを学ぶとき、私たちの人格は癌から救い出され、神の子として高められていく。私たちが赦すことを学ぶとき、憎しみと暴力の鎖は断ち切れ、敵が友に変えられる奇跡を私たちは体験していく。確かに敵を愛することは困難な仕事だが、憎しみと暴力の世界を変えることのできる現実的な力なのだ」と。

また、ルワンダのムセクラ牧師はこのようにことを語っています。「あの虐殺で絶望し、見捨てられ、死を経験した私たちには復活が必要だった。イエス・キリストから受け取った新しい命における赦しを实践するほかに、私たちには未来の希望はなかった」。「赦しとは、わたしが神から受け取った贈り物であり、わたしが無条件で誰かに与えるべき贈り物である」。「赦しを通して、私たちは加害者と被害者の間に新しい希望と新しい未来の可能性が生まれることを学んだ」と。

ムセクラ牧師の証言によるなら、敵意と憎しみと暴力に覆われた世界において、「敵を愛し赦す道」は、主イエスのご自身の生涯をかけて与えてくださった贈り物の道であり、私たちが死から希望に向かって歩みだすための新しい命の道なのです。

今、世界中に憎しみと憤りがあふれています。力ある者が、自分の欲望を、暴力で無理やり押し通し、おびたしい人びとが悲しみと苦難の涙を強いられています。ウクライナで起こっている戦争だけではありません。お金というパワーを持った者が、持たない人々の尊厳を奪い、たくさんの憎しみや憤りが生まれている現実が起こっています。「いじめ」や「ヘイトクライム」のように、社会の多数派の人たちが「自分とは違う価値観、文化を持っている」というだけで、あるいは単に「自分の好き嫌い」の感情だけで、少数派の人たちの存在を侮辱し、踏みにじり、その命の尊厳を深く傷つけることも、私たちのごく身の回りで起こっていることです。

憎しみや憤りが、人の命を深く傷つけ、奪っていく。その深い傷が、新たな憎しみや怒りに、人を駆り立てていく。憎しみや憤り、暴力と悲しみの連鎖を断ち切ることができない私たち。

その私たちに、主イエスは「神の愛が導かれる、新しい世界の可能性と一緒に望み見ていこうではないか」と私たちを「新たな可能性と希望の道」に招き入れてくださっているのです。その主イエスに従っていきましょう。